

会員のば

頑張れ！ 子どもたち

札幌市医師会
手稲溪仁会病院

衣川 佳数

手稲溪仁会病院で小児科医（小児循環器科）をしています。まずは、目立つ風貌から自己紹介します。身長は166cm、体重は68kgほどの中肉中背、お腹は少しだけ出ています。大きな特徴は頭部、頭頂部には髪がまったくなく、側頭部、後頭部は刈り込んで、一言で言えば「スキンヘッド」と言いたいのですが、まあ「つるっばげ」です。群衆の中でも、すぐに見つかけられると、うちの女房は言います。

外来は、およそ生まれた頃から診ている心臓病の子どもたちばかりです。診察室には、子どもたちが書いた絵が、壁一面に張ってあります。題まで付いている絵もあります。2～3歳の男の子が書いた「太陽と先生」。周りに線が少し書いてあるのが太陽、ないのが私とのことですが、とにかく○が2つです。『なぜ、わざわざ太陽と私と一緒に書くかな？「花と先生」とか、「ゾウさんと先生」でもよかったんじゃないかな？』と私は思うのですが…。

また、前額、頭頂部に光る紙をわざわざ貼った私の絵があります。6～7歳の女の子が書いた私の絵ですが、少し離れたところからもよく光って見えます。これは、病棟の看護師長が手伝っていたのを知っています。いつか仕返しをしようと目論んでいましたが、その看護師長はその後すぐに違う病棟へ異動となりました。

こんなこともありました。1歳半くらいの女の子、かがんで胸に聴診器を当てると、ちょうど彼女の目の前に私の頭が来ます。その女の子は、何を思ったかリズムよく私の頭をテンテンとし始めたのです。私は、「そこは太鼓ではないです」と心の中で優しく話しかけます。でも、そばにいた看護師さんは大きく噴き出し、お母さんは「すみません」と言いながらも笑って止めてくれません。みんなが笑うから女の子は喜んで続ける…。私は、「今日は、採血だ！採血！」と心の中で繰り返し、まったく気にしていないかのようにゆっくり顔を上げます。

心筋炎で入院していた14歳の女子中学生は、よう

やく退院も決まった頃、私に贈り物があると言います。それは黒いバレーボールほどの大きさの半球形、表面には1～2mmほどの黒くて細長い柵状の紙が無数に貼ってありました。見た目の印象は、バカでかいウニを半分にした感じでした。「一体これは何か？」と聞くと、本人いわく「手製のかつら」で、毎夜お母さんと一緒に作っていたとのこと。よく見ると、細かい工夫がされており、風通しがよいよう肌部は網目状になっており、後ろにあたる部分がなんとなく長くなっていました。私は、「中学生は、空いた時間は勉強をしてください。お母さんもこんなことを手伝わないでください」と内心ではつつこみつつも、どう反応して良いかわからない笑顔で受け取りました。

子どもたちは、さりげなく私の弱点に切り込んできます。でも、「太陽と先生」の作者は、すでに2度の心臓手術を受けており、一時期は母のいないICUでまったく泣かない、しゃべらない子になっていました。光る前額部の絵は、作者の女の子が手術を受け、弱ったところに、看護師長が私をダシにその子の元気回復を狙ったものでした。頭テンテンの女の子は、その後手術となりました。この女の子は、手術後も元気いっぱい、笑顔いっぱいでした。「手製のかつら」の女子中学生は、病棟に来る前には補助循環装置が付き、数ヶ月に及ぶ長い間ICUにいました。みんな、頑張っていた子どもたちです。

「手製のかつら」の彼女が退院する日に、前の夜こっそり撮った「かつらを被り、20歳ほど若返った(?)写真」を、病棟の看護師さんにはばれないように、こっそり彼女に渡しました。

頑張れ！ 子どもたち。



子どもたちから教わる名言、 子どもたちに伝えたい名言

札幌市医師会
札幌しらかば台病院

岩田 徳和

私には6歳、2歳の二人の子どもがおります。遊ぶ、学習する、寝る、食べる、全力で生活している子どもたちの姿を見ていると、頭にうかぶ名言があります。まず一つ目、「充実した一日は良い眠りをもたらす、充実した人生は幸福な終わりをもたらす」という、レオナルド・ダ・ヴィンチの一日一日を大事にしようという意味の言葉です。二つ目は子どもたちの「何のこと?」「何があったの?」「どういう意味?」「何で?」というたくさんの疑問に答えていると思ふ浮かぶ、「数寄は野の末、山の奥、道の端にも、不断の座舗にも、みちみちて御座候なり」という片桐石州の言葉です。風流の道は野の果て、山の奥、道ばた、普段いる部屋にもあふれるほどにあり、ビジネスや自己啓発でも同じことがいえます。自分を高める機会はセミナーに参加したり、学校に通うことだけで得られるわけではなく、会社の業務から通勤中、余暇、家庭内まで、至るところに転がっています。いつでも自分を高めようとする意識を持って過ごすことが大切であるという意味の言葉です。

また、子どもたちのこれからの人生に必要なものは何だろうと考えた時、伝えたい名言があります。「少にして学べば壮にして為す有り、壮にして学べば老にして衰えず、老にして学べば死して朽ちず」。佐藤一斎の、「若くして学べば壮年時に満足のいく仕事ができます。壮年時に学べば老年になっても衰えることがなく、老年になってから学べば死んだあとも人々の記憶に残ることができます。何かを学ぶことはこれで終わりということはない。生きているうちはずっと学びつづけなくてはならない。何か新しいことを学ぶのに遅すぎるということは決してない。(人生とは勉強し続けること)」という意味のことば。また内田魯庵の「至誠天に通ず」のことば。真心は必ず通じるもの、真心は天に通じるもの。どんなことでも心の奥底から偽りのない気持ちで事に当たれば、それが天に通じてうまくいく。いや、実際には天に通じるというよりも、人に通じることで状況が良くなっていきます。何かを達成したい、何かを伝えたい、そんなときは真心で行動していこう。そうすればきっと通じます。以上の2つの言葉を教訓として伝えたいと思います。子どもたちと接していると、いろいろなことに気付かされ、また、与えていくことになります。親も子も成長していきたいものです。

BABYMETAL三昧

札幌市医師会
天使病院

西村 光弘

昔は洋楽少年でした。洋楽なら何でもでしたが、ハードロックもよく聴きました。レッド・ツェッペリン、ブラック・サバス、ディープ・パープル、UFO、エアロスミス、キッス、グランド・ファンク・レイルロード、ジャーニーなどなど懐かしい限りです。では、何故よく聴いたかということ、歌謡曲がつまらなかったのもありますが、一番は勉強の邪魔にならなかったからのように思います。要は歌詞が入ってこないの、集中するための儀式として聴いていたようです。だから、いまだに曲のタイトルは知っていますが、歌詞の意味はほとんど知りません。

ここでBABYMETALです。一昨年の暮れころ何気にiTunes Storeでランキングを眺めていたら、BABYMETALが出てきました。以前から名前は知っていましたが聴いたことはなく、何気にYouTubeを覗いてびっくりしました。そこではアイドルとヘヴィメタルが見事に融合をしていました。何を隠そう歌謡曲は嫌いでしたが、ミーハーですのでアイドルは好きで、昔はキャンディーズのファンでした。それからすっかりはまってしまったのですが、いかんせん同志がいなくて、唯一見つけたのが営業に来ていたMRでした。彼も昔ヘヴィメタキッズだったようで、いつの間にか小生のはるか先を行ってしまいました。

医療情勢の厳しい昨今、診療と副院長業務に毎日追われていますが、唯一の癒しはiTunes Musicでclassic rock radioやBABYMETALを聴いたり、DVDを見たりすることです。最近はiPhoneとBluetoothのヘッドセット(片耳用)の組み合わせで、院内どこでも聴いています。すると少々疲れていても指示出しや書類書きを集中してできるようになりました。もうすぐ還暦ですが、BABYMETALにパワーを貰って頑張ろうと思っています(当直中BABYMETALを聴きながら、“See You!”)。



下手の横好き

札幌市医師会
恒心堂整形外科医院

佐藤 敏文

大学の合格発表以後に、大学のサークルから入部案内が何通も送られてきました。運動でも文化関係でも何かをやりたいと思っていましたので、案内を検討して、柔道部か室内楽合奏団に参加しようと決めました。入学式で室内楽の勧誘をしていたのが高校の同期生で、彼の勧めに乗ることにしました。高校生時代に聴いたロストロポービッチの弾くチェロに感動して、いつかはチェロを弾きたい願望がありました。

まずは順調なクラブ活動の滑り出しでした。札幌交響楽団団員のレッスンを受けることになりましたが、才能がないのがすぐ分かりました。でもチェロは続けることにしました。どこにでも顔を出したい性格なので、学内だけでなく市内のオーケストラにも参加しました。弾き始めて1年を過ぎたころに合唱団の定期演奏会に助演することになり、軽い気持ちで練習場に行きましたが、なんとチェロの独奏がありました。すぐ指揮者に上手に弾けなくて申し訳ないと謝りに行きましたが、彼は気楽に弾いてくださいと言ってくれました。先輩に交替をお願いすることなく出演しましたが、私が独奏している僅かな時間、舞台上の皆さんが緊張しているのが分かりました。その後も依頼があればどこにでも出て行きました。森昌子さんのショーにも出演しました。昔の厚生年金会館で2ステージ出演しました。一万五千円のギャラをいただきました。結婚式での演奏、行事のアトラクションにも出演してアルバイトしましたが、下手なままで定期演奏会に出演するだけの意欲を失った部員になっていました。最後の舞台は卒業3年目に市立室蘭病院に勤務していたときに、当時の安齋哲郎院長の命令で地元オーケストラの演奏会への出演でした。神島茂夫先生のバイオリン独奏は立派な演奏でしたが、私は弓に松脂を塗らずに音を出さず静かに演奏しました。

開業してからはゴルフに熱中し、レッスンをしっかり受けました。ハンディ6になりましたがラウンド数が少なく、片手シングルにはなれませんでした。趣味がゴルフだけでは、腰痛などでプレイができなくなったときに、ほかにすることがないのも寂しい。友人の歯科医が小唄を趣味にしていたので仲間に入れていただきました。師匠の弾いている三味線の音が気に入り、三味線もすることにしましたが、小唄と長唄を両方稽古するのは時間的に厳しく、小唄を断念して長唄のみ稽古を受けました。3年で「杵屋

勝敏郎」の芸名をいただきましたが、いつの間にかチェロを弾いていた期間を超えて10年以上続けることになりました。平成25年に東京の国立劇場で唄の師匠杵屋勝四郎の会で「綱館」を唄う機会がありました。ワキを札幌東高校卒業の人間国宝宮田哲男先生、立三味線は杵屋勝国先生に共演していただき、幸せな19分間の舞台を経験しました。出演料は120万円でしたが全く高いとは思いませんでした。同じ会で市川染五郎丈が私たちの演奏で越後獅子を踊りました。私の目の前で彼が汗を拭き後見と小道具の交換をしていましたが、踊りも所作も美しいと思いました。

平成27年8月に、突然、右膝関節水腫で、正座はもちろん歩行困難になりました。毎週木曜日にあいびきという座椅子を使用しますが、ほとんど正座の状態です。2時間稽古します。肥満体で正座をしているのがよくなかった。膝の軟骨が変性し、内側半月板損傷がありましたので、長唄を断念しました。歩行はできるので、しばらくやめていたゴルフを再開しました。練習場でレッスンを受けましたが、全然上達しません。頸椎症性神経根症、腰部脊柱管狭窄症、膝変形性関節症に悩まされている体ではいけません。しかし汗を流してコースを歩くのは気持ちのよいものです。現在ハンディをたくさん頂いているので、今年は島松の月例で1回優勝し、数回入賞できました。いまやハンディを少なくするより入賞をうれしがっている体たらくですが、もう少し上達したい。シーズンオフに減量、体力増強、練習と挑戦します。

音楽活動は声楽のレッスンを始めました。美人の先生のピアノでイタリア歌曲を歌い陶然たる面持ちは、傍にいたら気持ち悪いかもかもしれません。腹式呼吸を習得しましたが、邦楽と全く違う発声方法に面食らっています。邦楽・洋楽いずれも声を出すのは気持ちが良い。広く浅い私の趣味はレベルは低いが、好きな落語を聴きに行くと歌舞伎や文楽などを勉強したことで、いままでよく理解できないところがそうだったのかと膝を叩くことが結構あり、うれしい瞬間です。今一番の悩みは練習時間です。毎日が暇な外来で疲れはしないはずなのに、帰宅するとすぐ眠くなり稽古を満足にできません。でも少しでも練習しよう。継続は力なりが受験生時代のモットーだったはずだ。今後も淡々と続けよう。しかし自宅の和室にある桐の箆筒の中の私の着物が出番を失い、寂しそうにしているのがちょっと気になります。

西部劇の舞台を巡る旅

札幌市医師会
北海道脳神経外科記念病院

會田 敏光

最近、映画でもテレビでも、西部劇が上映されることがほとんどなくなっている。1960年代は、テレビのほとんどのチャンネルで、毎日のように西部劇がみられた。いまでもローハイド（フランキーレインの歌った主題歌がなつかしい）、ボナンザ、ララミー牧場、ライフルマン、拳銃無宿などの題名がすぐに浮かんでくる。NHKですら「西部のパラディン」という西部劇を毎週やっていた。その頃は、西部劇に関する月刊誌も数冊出ている、ガンマンという雑誌を購読して、さらに安いコルトピースメーカーのモデルガンとガンベルトを買って、抜き打ちの練習に励んでいた。中学生で初めてひとりで映画館に入ったのも友人の手引きで、ただで潜り込んだ狸小路にあった帝国座の「シェーン」であった。小学生、中学生から現在まで西部劇好きは変わっていないが、一度は西部劇の舞台になったアメリカ西部の大自然を実際に自分の目で見てみたいという夢を持ち続けていた。この夢がかなったのは、1983年から2年半、サンフランシスコに留学する機会を得たときであった。

600ドルで中古車を手に入れ、1984年の初夏とクリスマスに2回に分け、カリフォルニアから、アリゾナ、ニューメキシコ、テキサス、ネバダ、ユタ、ワイオミング、サウスダコタ、モンタナ、アイダホ、ワシントン、オレゴン各州をドライブした。グランドキャニオンやイエローストンのような有名な国立公園に宿泊したが、当然、西部劇の舞台である、「シェーン」の背景のワイオミングのグランドティトンやバッファロービル記念館のあるコディ市に宿泊してロデオを見たり、モンタナのカスター将軍終焉の地リトルビッグホーンは行程に含まれた。

中でも、どうしても訪問したかったのは、アリゾナのトゥームストーンの町だった。この名前を聞いてすぐにピンとくる人は西部劇の通だが、あの「OK牧場の決闘」の場所といわれると分かるでしょう。そうアープ兄弟とクラントン一家が決闘を行った町である。幹線道路から南にはるばる車を飛ばすと本当に小さな寂しいところで、日本人旅行者など一人もいない。町役場でトイレを借りてから、OKコラールに向かった。入場料として1ドル払って、内に入ると名札の付いたマネキンが拳銃を構えて、5mぐらいの距離で向かい合っていた。やはり拳銃の命中率は低いので近距離で撃ち合うものだと感心した。当時の新聞のコピーを記念に買って、それでも憧れ

の地を訪問できて満足した。

この旅行で計画したが、降雪のために行けなかったところがあった。それは、数々の西部劇が撮影されたモニュメントバレーである。あの時以来、アメリカ西部を訪ねる機会はないが、ジョンフォードの「駅馬車」で、ジョンウェインが疾走したモニュメントバレーを見たい。もう一つ行き損ねたのが、アラモ砦である。JTBの窓口に行くたびにアメリカ西部の旅行パンフレットをもらってくるのだが、毎年それを眺めて計画を立てるだけで終わっている。ああ、来年こそあの地に立ちたい。



アリゾナ州・トゥームストーンのO. K. Corral (牧場)



決闘のマネキン

北海道日本ハムファイターズの プロ野球日本シリーズ 2016年優勝に思うこと

札幌市医師会
北海道保健福祉部

松永 卓也

昭和63年に大学を卒業後、大学病院での勤務が長く、昨年、札幌市医師会と北海道医師会に入会させていただきました。私の仕事の関係で、北海道医師会の先生方には日頃から大変お世話になり、ありがとうございます。この場を借りて、深く感謝申し上げます。

この度、原稿執筆のご依頼を頂き、大変光栄なことと思いましたが、もとより浅学・若輩の私ですので、皆様のお役に立てるテーマが思い付きませんでした。そこで、この度の日本ハムファイターズの日本シリーズ優勝に際して、マスコミ報道されたこと、自分なりに考えを巡らせたこと、等を思いつくままに書かせていただきます。どうぞ拙文をお許してください。

まず、何とんでも「二刀流(=大谷選手)」についてであります。今シーズンで入団4年目になった大谷選手は「リアル二刀流」を確立し、右手の負傷が原因で登板できなかった2ヵ月間は「クリーンアップ打者」として余りある結果を残し、パ・リーグ優勝マジックが点灯する頃には「エース投手」に復帰して、その役割をきっちり果たしたことは、まるで「劇画的ヒーロー」のようでした。私は、医師の二刀流について考えてみました。医師と議員、医師と弁護士、医師と作家、医師とタレント、医師と歌手、医師と演奏者等、さまざまな二刀流を実践されている先生方は多数いらっしゃると思います。私の勝手な想像ですが、議員、弁護士および作家には医師免許を取得した後になる、タレント(ただし医療系のTV番組で医学・医療の解説をされる方々を除く)は医学生時代(つまり医師免許取得前)に“デビュー”する、歌手や演奏家は医師免許の取得時期とは無関係に世の中に認められるが、幼少期からの準備(英才教育)が必要ではないでしょうか。お恥ずかしいことに、私は「一刀流」もままならない状態ですが、本拙文をお読みになった「二刀流」を実践している先生に、本誌でその極意をご紹介いただければ幸いです。

次に、「栗山監督と選手達の信頼関係」についてであります。「栗山監督は頭ごなしに選手を怒ったり、根性論で押し通したりするのではなく、客観的に評価する姿勢が個々の力を引き出した」「栗山監督は選手との対話を大切にしている印象がある。選手の能力を信じることでチームを逆境から奮起させたのでは」等の新聞記事を読みました。上述の通り、レギュラーシーズンの途中で大谷選手を2ヵ月間打者専任で起用した間は、ルーキーの投手が栗山

監督の期待に応えて大活躍、シーズン当初は抑えの役割を担っていた投手が調子を落とすと、その投手をその後は先発に役割変更して大成功、一人の投手を先発と中継ぎの両方で起用し結果を残した、等はその証拠だと思います。プロ野球に限らず、病院等の職場でも、上司と部下、および同僚同士の信頼関係が重要なことを再認識させられました。幸運なことに私は現在の職場の方々に大変お世話になり、その方々を信頼して仕事ができ、感謝の気持ちでいっぱいです。今後は、私が職場の方々の信頼を得るべく、明日からさらに努力をしたいと強く考える次第です。

最後に、「絶望的な劣性に立たされた時の戦い方」についてであります。レギュラーシーズンにおいては一時ソフトバンクに11.5ゲーム差をつけられながら最終的にはパ・リーグ優勝し、日本シリーズでも2連敗のスタートから4連勝で頂点に立ち、「客観情勢という「森」を見渡せば、道を開拓する心は萎えたに違いない。その日その日の対戦相手という「木」だけを見つめ、目の前の一本を切り倒すことだけに精魂を傾けての大逆転劇である」「栗山監督は明日のことだけ考えるなどと1戦1戦を大切にすコメントを残してきた」「不振の時に中長期の展望を語られても現実味を持ってない。短期の目標をしっかりと伝える姿勢が逆転劇につながったのではないか」等、マスコミからの賞賛記事は数多い。栗山監督も日本シリーズ優勝の際のインタビューで、「離されてもあきらめない。チームは成長したと思います。(白熱した試合が続く)野球がおもしろいと改めて感じてもらえたらありがたいです」と語りました。これまで、お仕事で成功をおさめたご経験のある先生方には、ごく当たり前の記事なのかもしれませんが。また、長年医師としてお仕事を継続されている諸先輩にも、何の不思議もない記事なのかもしれません。ただ、今後長期間、医師という仕事を継続したいと希望している、いまだ50代半ばの私にとりましては、とても教訓になる出来事(マスコミのコメント)であり、1日1日を充実したものにして、1本でも多くの「木」を切り倒していきたいと考えてところです(もちろん、私には対戦相手や敵はおりませんが)。

以上、ファイターズの日本シリーズ優勝について、私の勝手な考えを記載させていただきました。蛇足ですが、ファイターズの日本一が近づくにつれ、私の家族も興味を持ち、家族全員で応援するようになりました。一番喜んでいたのは優勝後のセールだったようで、優勝した翌日には家内が早速いろいろ買い込んできて、家計的には見事な「救援(リリース)」どころか、思わぬ「打撃」を受けてしまいました。

最後になりますが、これからも北海道医師会の先生方には、いろいろな場面でお世話になると思います。私は皆様にご迷惑をお掛けしないように努力する所存ですので、末永くご指導を頂ければ幸いです。

趣味

小樽市医師会
北海道済生会小樽病院

織田 崇

10月20日に元ラグビー日本代表監督・主将で神戸製鋼ゼネラルマネージャーの平尾誠二さんが、53歳の若さでご逝去されました。スクールウォーズ世代であり、大学生活の大部分をラグビーに費やした私にとって、大変ショックな知らせでした。華麗なステップやパスワークなどプレーヤーとしての活躍はもちろんですが、主将として神戸製鋼が日本選手権7連覇を果たすに至る黄金期を支え、日本代表をラグビーワールドカップ初勝利に導いた卓越したリーダーシップでも良く知られた方でした。リーダー論やマネジメントについての著書も多く、ラグビーだけでなく、他のスポーツやビジネス界などの多くの方が影響を受けたことと思います。

平尾さんの数ある名言の中で深く印象に残ったコメントの一つが、日本一の座を懸けて大学王者と戦った日本選手権に圧勝した後のインタビューでの言葉でした。ますます開く大学チームとの実力差について尋ねられると、「趣味でやっているわれわれとの違い」と答えたのです。趣味と聞くとラグビーが好きで、楽しく自発的にやっている、というニュアンスで捉えがちですが、真意は別のところにあると感じました。当時のラグビー界では国を問わずアマチュアリズムの遵守が強く求められており、ラグビーにより対価を受け取ることを禁止されていました。試合への出場報酬や休業補償はまったくなく、トッププレーヤーであってもフルタイムで仕事をし、練習後にまた会社に戻って残業することも少なくなかったようです。社会人選手が結果を残すためには、まず効率よく確実に仕事を済ませることが必須で、その上で徹底した自己管理とトレーニング、無駄と妥協のないチーム練習を行うことが必要とされたのです。平尾さんの「趣味」という表現の根底には、それを自主的に世界に通用する高いレベルでやり抜き、社会人リーグを勝ち上がったという、強烈な自負があるのだろうと思ったものです。

あのインタビューから20年以上を過ぎました。私はどうに楯球とは距離を置き、日常診療の傍らで専門分野の全国学会発表と論文執筆をノルマと課して、これまでなんとか続けています。勤務医ですので学術活動は本業ではなく、好きでやっているはずなのですが、何かにつけて自分に言い訳をし、手を抜いてしまいがちです。やはり、楽しく自発的にやっているだけではなかなか満足する成果は得られません。Mr. Rugbyの「趣味」の境地は相当遠いところにあるようです。

愛犬と一緒にボランティア活動

札幌市医師会
市立札幌病院

関 利盛

市立札幌病院の院長職を命じられて3年目になりました。当院は地域医療支援病院ですので、他の医療機関の先生方からの依頼を受け付けて、患者さんのsmoothな対応を職員一同心がけておりますが、なにせ1,200名以上の職員が勤務している病院ですので、毎日のようにいろいろな案件が持ち込まれ、胃の痛くなるような日々が続いております（ちなみに就任後、体重の変化は残念ながらありません）。

そんな中で、唯一の楽しみは子どもたちと一緒にいく週末の散歩です。子どもたちを紹介します。クマ（6歳、男の子）とキリン（1歳、関家始まって以来の女の子）で、どちらもシェルティーです。2年前まではトラ（享年11歳、男の子）とクマの二人と一緒に散歩に行っていました。トラが2年前に天国に召されて以来、クマは自分で歩こうとせず、バギーカーに乗せて散歩する日々が続きました。一人で散歩するのが不安だったので。しかしキリンが来てからは自力で歩くようになりました。犬にもペットロスの気持ちがあるのでしょうか。クマはキリンが来てから見事に立ち直りました。

数年前に犬仲間に誘われて、円山ワンワンパトロールという、犬と一緒にパトロールしようという趣旨のボランティアの会に入会することを誘われて入会することにしました。自分たちの散歩コースである円山公園を、月に1回清掃することが主な活動です。雪解けの5月から始まり、10月までの半年間ですが、毎月1回集まり清掃しています。たくさんワンコが集まり、見ているとみんな挨拶の臭い嗅ぎで大忙しです。落ち着きのない子、内気な子、病気の子、やんちゃな子など、いろいろなタイプのワンコがいることが分かります。この子たちの動きを見ていると、何となく気分がリフレッシュされます。私のほうが、クマ、キリンの世話をしていると思っていましたが、本当は逆に世話されているのかもしれない。「これからもよろしく」と、クマ、キリンに話しかけているこの頃です。



顔

札幌市医師会
北海道整形外科記念病院

加藤 貞利

先日『顔』に関するニュースが世界を駆け巡った。フランスの新聞が伝えたニュースであるが、世界で初めて顔の一部の移植手術を受けたフランス人女性のイザベル・ディノワールさんが、今年4月に死亡していたとの記事である。享年49歳であった。

ディノワールさんは飼い犬に顔を噛まれて、鼻や口、それにあごの一部を失う大けがをした。通常の手術では回復が見込めないとのことで、2005年にフランスの病院で脳死状態になった女性から顔の皮膚や筋肉などの移植手術を受けた。当時は顔面の移植手術は強い拒絶反応が出るために難しいとされていたが、ディノワールさんの手術が成功してからは中国やアメリカなど世界で30人以上の患者さんがこれと同様の手術を受けているという。

ディノワールさんは手術後、移植した組織の拒絶反応を抑えるために治療を続けていたが、この拒絶反応を抑える治療の影響でガンが進行して死亡した可能性が伝えられている。

命と引き替えに『顔』を手に入れるという問題は、どう考えたものだろうか？

そういえば、安部公房の『他人の顔』という題名の小説を学生時代に読んだ記憶がある。化学実験の際に顔に大きな損傷を負い、顔全体がケロイドに覆われた人間の、精神の大きなゆらぎを表した小説である。その中で彼は、「顔の損傷は単に形態上の問題だけで片付けられるものではなく、むしろ精神衛生的な領域に属することと考えるべき問題である」と記述している。さらには多くの負傷した兵隊たちを観察した軍医の話として、「外傷、とくに顔面の傷の深さは、まるで写し絵みたいにそっくり精神の傷になって残る」という記載もある。

つまるところ『顔』というものは単なる顔ではなくて、『顔』はその人間の「自己そのもの」であり、「自分と他人を結ぶ通路」でもあるとの指摘が、この小説を構成する主題であったようだ。

『顔が人間同士の通路』であるならば、その通路を破壊された人間は、どうしたらよいのだろうか？

「顔なんてものは眼と口と鼻と耳があって、それぞれの機能が不自由なく働いてくれさえすれば、それでたくさんなのだ。他人に見せるためのものではなくて、自分自身のものであるはずだ」という慰めが、顔を失った人間にとって、何ほどの役に立つのだろうか。

一方、世間では『顔』はその人物を代表するもの

として扱われる。ある一定の年齢を過ぎれば、その人の人生が顔に出るのである。そして「男の顔は履歴書」あるいは「40歳を過ぎたら自分の顔に責任を持つ」などという言葉もある。もし『顔』が履歴書ならば、あるいは「顔に責任を持つ」必要があるならば、「顔が人間同士の通路」と言われて反論するのは難しい。

もちろんここでいう『顔』とは、一つ一つのパーツの造作や、目や鼻の配置の問題などではない。ここでいう『顔』とは、表情のことであろう。

表情というものは、生活が刻んだ年輪のようなものである。それぞれの生き方によって反復される表情の傾向というものがあり、それが例えば皺になったり、たるみになったりして顔貌を作る。しじゅう笑っている顔には、自然に笑いもなじむ。逆に常に不満や怒りの感情にかられていれば、怒りの表情が定着する。すなわち、これまで過ごしてきた私たちの人生は、現在のわれわれの『顔』に集約されているのである。

「幸運」は笑顔に引き寄せられ、「笑顔」はその人の考え方、生き方によって作られるという。親から受け継いだ『顔』を何事もなく維持することができた多くの運の良い人間は、これから先の人生を「より良い顔作りの旅」ととらえ、「素晴らしい表情作り」に励むというのはいかがであろう。

それはあたかも樹木がその年輪を一つ一つ刻みつつ、味わいのある老木となっていく過程に似ている。



医者いらず

札幌市医師会
なかの内科・消化器内科クリニック

中野洋一郎

このところの人工知能(AI)の進歩は凄いもので、しばらくは困難だろうと予想されていた囲碁対局で名人を凌駕する事態となり、将棋界での対局中のスマホ禁止令は記憶に新しい。医療の分野では「WATSON」が難治性の白血病患者の治療法の選択に寄与した話題があったように、膨大な医学論文を学習し、患者の遺伝情報などをもとに最適な治療法を選ぶ研究が東京大学やシカゴ大学など日米共同で進んでいるようだ。

今の技術革新が続くと、あと30年ほどでコンピューターが全人類の情報処理能力を超える技術的特異点になるといふ。IT専門家によると、AIの進歩が続けば、人類の仕事の9割は代替可能になり、医療界では「精神科医」以外は生き残れないとの予想もあるようだ。医者には手術スキル、そして視覚、聴覚などの五感からの診断能力もあるといっても、ロボット技術、カメラ等の進歩の方が勝るかもしれない。タイトルは「腹八分に医者いらず」という諺ではなく、医者が不要になるかもしれないとの意なのである。

とはいっても、実臨床に携わる医師なら誰もが、先のIT専門家の予想は間違いで、そう簡単にAIに職を奪われるなんてまるで感じられないのが本音であろう。なぜなら、「精神科」以外のどの診療科であっても、診療に「心の問題」はつきものだからである。

近い将来、診断と治療について、AIが絶大な支援を得られる時代になった時に、専門医としての仕事を奪われたと考えるか、余裕ができてさらに患者本位の診療ができると考えることができるのかは、医師キャリアとしては重要なポイントであろう。

医学論文は、米国データベースに2,600万件以上登録され、がん関連だけでも毎年20万件増えているそうである。日本の各学会の発行する診療ガイドラインもどんどん分厚くなり、最新の情報についていくのは専門医でも大変と感じる。日常診療はAIとの戦いではないから、スマホでなくても電子カルテなどでAIがサポートする可能性は、実用的なものならば大いに活用したいと思う。

来年から新専門医制度が始まるとのことだが、医師キャリアについて、こういった時代の変化にも対応した制度改革になることを願う。

夢のなかでも

札幌市医師会
柏葉脳神経外科病院

磯西 克佳

旅先でよく道に迷う。最近は夢のなかでも迷うことがある。夢のなかでは目指すべき処が見えていながら、どうあがいても決してたどり着けない。もどかしいことこのうえない。初めて訪れた地では、ホテルが用意している地図に道順を書きこんでもらうことにしている。近頃は小さな文字が見えないせいもあって、当てにできない。大きな通りを目印にするつもりで出掛けるのだが、ついふらふらと脇道に誘い込まれてしまうものだから、ややこしいことになる。さらに、地図では分からない高低差、入り組んだ小路で元々よくない方向感覚が乱されてしまう。行ったり来たりを繰り返し、やっとたどり着いた時はほっとする。迷った道すがらの景色や出会った人々は、後日みやげ話のなかでよみがえる。寄り道(迷うの)もそう悪くないが、肝心なのはそもそもの目的。寄り道に割く時間は少ないほうが良い。

昨年暮れ、カラヴァッジョの果物籠を見に、アンブロジーナ絵画館を訪ねた。この時もやはり迷った。ホテルから数百メートルぐらいの距離で、よもや迷うことはあるまい、と高をくくって出かけたが、幹線道路から横道に逸れなくてはならなかったのに通り過ぎてしまった。持ち時間は、チェックアウトまでの二時間。すこしばかり早足で道を探し、三十分ほど余計に歩いて絵画館にたどり着いた。「果物籠」は、仄暗い書庫と思しき中空に浮かぶように掛けられていた。影はわずかで光源をさがす眼をあざむくように、絵それ自体がひかり輝いていた。幸せな美しさに満ちていた。

ひかりが巧妙に散乱させられている、あるいは、意図せず混沌が浮かび上がったとも見えるボルゲーゼ美術館の「ダヴィデとゴリアテ」から始まった二十年来のカラヴァッジョ詣では、制作年からみると逆をたどってきたようだ。ダヴィデの視線が向かう先は、奈良興福寺の阿修羅のそれと同じだ。見えないはずの喜びと悲しみの照り返し、そして再びたどり着けない過去。

ひとの一生を旅に見立てることが許されるとして、その旅の終わりまでに迷いから脱け出て、悟りきっていくのも幸せのひとつのかたちには違いない。しかし、迷悟一如、とも言える。無にや夢にや。

地域包括ケアシステム と古き良き時代と

室蘭市医師会
市立室蘭総合病院

土肥 修司

北国の夏は、暑さも異常さも年々増しているようだ。今年の夏も終わった。中村草田男氏に

「絶えず小言いはれし頃とラムネの味と」

という句がある。暑い日にビー玉入りのラムネ瓶から途切れ途切れに出てくるラムネがのどを潤す、ビー玉が瓶の口を塞ぐため、急ぎ呑むには指をつかって玉を押し込ませなくてはならなかった。時に瓶から指が抜けなくなり、多分このことへの母親の小言とが重なり、郷愁を誘うのだ。氏の晩年時代を、青年として生きた私の世代の多くには、夏のラムネの味とともに、1970年代は古き良き時代と映っている。発展に向かっていった時代であった、と思う。日本の人口が1億人を突破したのは1968年であった。

人生の成功者が老後を過ごす憧れの地は、1970年代のアメリカではマイアミであった。右肩上がりの成長を信じ切っていたわが国も、アメリカは自由とともに、社会の仕組みも、食も医療もスポーツも、そして退職後の年金生活もすべて憧れであった。「臨床や研究留学」も医師としての憧れを満たすものであった。私も1975年1月からマイアミ大学のJMHのレジデントとしての職を得た。病院に限らずどこでもエアコンがフル回転なのか、暑かったという記憶はないが、常夏のマイアミでは最も口に合った清涼飲料水はレモネードであった。後日、ラムネはレモネードが転訛してこう呼ばれるようになったと知ったのだ。コカコーラと言えばコーヒーが出てくる私の英語の実力では、レモネードは安く、英語でも注文のしやすい清涼飲料水であった。

当時のマイアミビーチは、世界の富裕層のリゾートでもあったが、ビーチの通りには瀟洒な低層のアパートが立ち並び、どの玄関前の椅子にも通りに面して老人が座っていた。定年後の人たちがアメリカ全土から暖かなマイアミに移住してきていた。退職してお金に余裕があり、年金ももらって悠々自適の生活を送っている老人たちが、プール付きの緑の芝生があるアパートに住んでいる。スーパーマーケットや大ショッピングセンターも隣接し、赤いシャツや黄色のショートパンツをはいた高齢の夫婦は、手をつないでショッピングを楽しんでいた。海沿いの住居、食糧等の日用品マーケット、娯楽施設、病院など生活に必要な施設を揃えた退職者の地域共同体社会（CCRC、Continuing Care Retirement Community）の姿であった。まさに健康を謳歌していた。そして病院にも現れる彼らは、例外なく肥満体であった。マイアミビーチのMount Sinai Medical Centerは、心臓手術とその術後管理とが

世界一上手いと評判であった。

病院で出会った患者や家族の多くは、ニューヨーク等の北部の人たちであった。クリスマス時期の空港には、高齢の夫婦がスーツと毛皮のコートで到着ロビーに立ち、これまた毛皮に身を包んだ北からやって来る家族を出迎えるのだ。半袖シャツの私は殊更貧相さを感じたものだ。

地域包括ケアシステムは、退職後の人々がまだ健康なうちにある地域に移り住み、そこで健康でアクティブな生活をする。医療・介護が必要になった時も住み替えることなく継続して治療やケアが受けられるという日本版CCRCの骨格を成す構想である。老人ホームのような孤立した「家」に移り住むのではなく、高齢者は、病院も介護施設もコンビニもある「地域」で活躍しながら生きる。健康時から介護時まで継続的ケアの提供、70年代当時のマイアミの地域共同体社会CCRCの姿、これをわが国でも取り入れようとする動きである。

広島県公立みつぎ総合病院でも75年頃から看護や在宅医療を『出前』するサービスを開始したという。マイアミとは大きく異なるものの、職を離れた高齢者を地域共同体社会に組み入れるという基本では一致する。そこには、住居、ショッピングセンター、娯楽施設、病院や介護施設、保健福祉を担当する部署など生活に必要な施設もあり、小さな街の機能がある。

日本版CCRC構想には、大都市圏の人生の成功者が魅力を感じて移り住み、理想的な終の住処となる可能性もある。政府の『一億総活躍社会』が目指す社会的な営みに参加して地域社会に貢献したいという老人の想いを構想の中に取り入れることもできる。長い老後のどの年来層をターゲットとするかによって構想も異なろうが、地域特有の魅力ある街づくりに参画してほしいものだ。

北国の地に戻って6年間、私はさまざまな街を訪れ、「人口減だけが確実な未来」と予言された、その真っ只中にいることを実感してきた。少子高齢化の現実には容赦ない。未来への展望はいつも限定的だが、70年代のアメリカもそうであった。その時代は、私どもは貧しかったけれど、人々には節度があり、身の程を知り、人を敬う気持ちが重視され、そして何より努力が報われ、時に立ち戻り再挑戦できる穏やかな社会であったという思いがある。我慢強くもあった。私には、当時マイアミビーチの老人たちは何故か寂しく孤独に感じられたことも記憶にあるのだが、出会った若い医師たちにとってもマイアミは老後を過ごしたい希望の地であった。

それから45年後のわが国、価値観を異にする大都会の人々や若者が、地域のCCRCに希望を抱き、地域発展のビーコンとなる道筋を示すことができるだろうか。急ぐ必要はない。暑い夏でもビールの一気飲みでなくとも、冷たいラムネで途切れ途切れに喉を潤すだけで満足もできるのだ。老人社会の発展も時に途切れてもいいのではないか、その間、私は孤独に耐える知恵を養いたいと思っている。

未熟児医療の進歩と 人工肺サーファクタント —その陰にあった本当らしい話—

札幌医科大学医師会
北海道立子ども総合医療・療育センター

新飯田裕一

私は卒業後、札幌医大小児科に入局して総合小児科医として7年間研修を行い、1987年10月1日付けで小樽市銭函にあった道立小児総合保健センターに赴任し、新生児病棟勤務となりました。同年11月に人工肺サーファクタントが薬価収載されて（1パイアル13万円）日本での発売が開始されました。世界初の人工肺サーファクタントでした。それまでの未熟児医療の臨床現場で最も困難な疾患が新生児呼吸窮迫症候群（以下RDS）でした。早産児では肺の未熟性により肺サーファクタント産生が少ないため、出生直後より重度の呼吸障害が発生、その後気胸や循環不全を併発して多くが生後3日以内に死亡してしまうという経過をとりました。未熟児にとっては、生後最初に出会う高い障壁を乗り越えられずに短い一生を閉じるという、悲しい現実がありました。新生児科医にとっても、人工呼吸器などを駆使しても乗り越えることが困難な障壁でした。

ところで、1960年代からRDSの病因を追求する基礎的研究が米国を中心に始まっていました。当初は感染説、循環障害説など五里霧中の状態でした。UCLA（カリフォルニア大学ロサンゼルス校）のAvery医師は、肺サーファクタント欠乏説を信じて動物実験を進めていました。そこに日本の小児科医が参入しました。藤原哲郎先生です。藤原先生は岩

手医大の出身ですが、卒業後東北大学大学院に入り、1962年より米国留学されてAvery医師のもとでサーファクタント研究に従事することになりました。RDSにて死亡した未熟児の剖検肺にサーファクタントが欠乏していることの証明から始まって、未熟ヒツジRDS肺への天然サーファクタント注入による効果の確認、さらにヒトへの応用となりますが、ヒトの場合には異種蛋白の除去と有効性の維持が一番の難関でした。1970年代に秋田大学助教授に就任して人工肺サーファクタント開発（商品化）に着手しました。牛の天然サーファクタントから有機溶媒で親水性蛋白を除去しても表面活性は損なわれないこと、さらにDPPCと酸性リン脂質を添加すると表面活性は極めて均一になるという発見をしました。これらの研究成果は1980年Lancetの1月号巻頭論文として紹介されました。日本ではサーファクテンという商品名で全国の未熟児施設で使用され1990年代には日本の未熟児の生存率が世界のトップに躍り出るための大きな要因となりました。

この辺の経緯を調査していくと、一つの事実につながりました。かの有名な米国大統領ジョン・F・ケネディは1963年に暗殺されました。残された子どもは姉（現在駐日大使）と弟ですが、実は第3子が未熟児で出生して、RDSのため死亡したとのことでした。このことが契機となって、RDSに関する研究費も確保されて、米国での研究が盛んになった可能性が出てきました。そこに日本から留学していた藤原医師が研究に加わり、帰国してから人工肺サーファクタントの商品化に世界で初めて成功し、未熟児医療の画期的な進歩につながっていったということになります。

北海道医師会 育児サポート事業のご案内

病児・病後児の預り時に、 ぜひご利用ください!

北海道医師会が利用料金の一部を負担する、会員限定の利用券での支払いが可能です。



子育て中の医師の仕事と家庭を
両立するためのサポートです。

お問合せ先

一般社団法人 北海道医師会 事業第三課

〒060-8627 札幌市中央区大通西6丁目 FAX 011-231-7272

TEL 011-231-7300 E-mail josei-dr-shien@m.douji.jp



小児科領域のPoint-of-care超音波 ～小児超音波研究会の活動から～

函館市医師会
函館渡辺病院

水関 清

2014年に発足した日本小児超音波研究会(内田正志理事長)の第2回学術集会在、2016年10月22日、埼玉県さいたま市で開催された。今回の主題は、「領域を超えた小児超音波医学」で、市橋光副理事長(自治医大さいたま医療センター小児科)が会頭を務められた。

この研究会の第1回の主題であった、小児の特性を念頭に置いた、可能な限り低侵襲の検査の普及(いわゆるALARA(As Low As Reasonably Achievable)コンセプト)は、既に腹部・心臓・体表領域において確立されつつある。これらの現状を踏まえて、今回の第2回研究会では、臓器別の領域を超えた小児超音波検査のあり方に着目した討論の場が準備され、市橋会頭の求めに応じて、頭部・脊椎、新生児、運動器、肺、血管と多様な領域を扱った演題が、教育講演や一般演題にちりばめられるという壮観を呈していた。

中でも、小児救急のシステム内に、どう超音波検査を組み込むのか、についての教育講演(桜井淑男・埼玉医大小児救命救急センター長)は、超音波の特性を活かしつつ、小児科ならではの特定領域を超えた総合性を反映した、興味深いものであった。

近年、装置の小型化・画質の向上・低価格化が進み、bedsideでの超音波検査の活用が模索された結果、point-of-care ultrasonography (POCU)という考え方が注目され、特に急性期診療における有用性に注目が集まるようになった。放射線被曝の恐れがない超音波が備える非侵襲性は、ALARAコンセプトを求める小児の特性にもよく合致していることから、小児救急の分野でその普及が図られている。

実際の診察場面では、身体所見と病歴聴取だけで病態の評価や重症度を判定するには限界を感じる反面、緊急時に細かい検査に踏み込むだけの時間も確保されていないことも多い。この相反する要請に応えようとするひとつの考え方が、POCUである。すなわち、気道・呼吸・皮膚の状態・瞳孔所見・外表所見からなる一次評価、そして焦点を絞った身体診察と病歴の聴取からなる二次評価と並行しながら、プラスαの検査としてPOCUを行うことで、治療に直結する病態分類を行うのである。

これまで、小児を含む重症者の評価には、RUSH(Rapid Ultrasound in Shock)評価が推奨されてきた。Pump(心機能評価)・Tank(循環血液量評価)・Pipe(血栓や動脈瘤などの血管評価)からなる循環動態の把握は、これまでの系統的な心臓超音波検査(comprehensive echocardiography)による評価法を大胆に簡略化したものである。例えばPumpは、傍胸骨長軸/短軸・剣状突起下・心尖部の断層像から、左室収縮能・左室拡張径・右室拡大・心タンポナーデ・房室弁逆流の状態を素早く観察する。次にTankは、下大静脈長軸・両側肋横隔部と

小骨盤腔の観察をするFAST(focused assessment with sonography for trauma)と呼ぶ外傷評価・経前胸壁的な肺の観察、の各項目から、循環血液量減少・胸腹水貯留・肝/脾/腎の損傷・気胸の有無を評価する。最後のPipeでは、胸骨上～傍胸骨～心窩部～臍上部に至る大動脈・大腿静脈・膝窩静脈の観察から、動静脈の血栓・塞栓や大動脈解離の有無を観察する。

これらの知見の基礎となるものは、これまで心臓や腹部・体表などの領域において、系統的超音波検査として発展してきたものであるが、POCUでは、それまで腫瘍性疾患の評価に主眼が置かれてきた肺の超音波検査に、外傷性気胸や肺水腫の診断についての臨床研究が重ねられた。その結果、lung sliding・B-lines・lung point・lung pulse等の超音波所見が加えられ、超音波は気胸の除外診断能において臥位X線より高精度であるなどの知見が知られることとなった。またPOCUは、肺水腫にも一定の診断能のあることがevidence-basedに明らかにされた。すなわち、胸膜下の肺胞内の含気と肥厚した小葉間隔壁や増加した血管外水分との間で、胸膜を示す線状エコーから連続して肺の深部に至り、lung slidingに同調して動く多重エコーが生じるという現象が、肺のあちこちで観察されることをもって診断するもので、その検出の感度94.1%・特異度92.4%とする報告がある。さらに、B-linesの数的消長をもって、治療効果判定に有用とするものもある。

超音波を含むすべての検査は、一般診察や病歴聴取で想定される、疾患の存在を予測する事前確率を、それを行うことでより高い事後確率に導くことにその主眼を置くべきであることは、言うまでもない。従来検査室で、臓器別専門医や画像診断医らが、診療行為の一環として包括的に行ってきた系統的超音波検査は、その知見の積み重ねを学習する検査士制度の創設などの適切な精度管理のもと、かなりの部分を検査技師が担うようになってきた。一方で、診療医によって疾患等の急性期に行われるPOCUは、身体所見や病歴などの情報を念頭に置いた上で、治療という目的を指向して行われるもので、方針決定に必要な情報をすばやく引き出す問題解決型アプローチの一環である。その意味でPOCUは、医師自らが行う従来型の超音波検査であり、被験者の緊急度や置かれた状況に応じて臨機応変に利用されるべきものである。放射線科医による超音波検査を先行させることで、CTによる急性腹症診断の要請が半減したことや、集中治療医が肺の超音波検査をすることで、CTの施行回数が減少した、などという報告も出てきている。

すでに言い尽くされてきた感もあるが、超音波検査には、検者の技能の優劣によって画像の客観性や検査の質に差が生じる、いわゆるOperator-dependencyという問題が内在する。今後の発展性を占う上で、カギとなるのは、これらの問題点への対応である。すなわち、POCUで得られた情報が共有に値する価値を持つためには、手技の普及・教育プログラムの整備・超音波画像と他の情報との比較検証等を通じての妥当性の検討など、着手すべき課題は多い。その上で蓄積された情報を、evidenceにまで高めることが必要である。

小児超音波研究会のこれからの活動に期待したい。

好日好読 『人間腫瘍学』を読む

空知医師会
方波見医院

方波見康雄

「腫瘍学」に「人間」という言葉を冠した本書は、題名からしてユニークだ。たぶん日本の医学関係書としては初めての試みだろう。ではどうして「人間」なのか。本書「あとがき」に、著者はこう書いている。

「40年前に、わが国初のがん医学専門書『腫瘍学』（南山堂）を出版したが、がんそのものの科学的記載に終始し、人間的な関わりが十分でなかった。今回は、「市民一人ひとりの共有の読みもの」にしよう、がんをもった人間にウエイトを置いて書いたので、人間の匂いがプンプンするくらいになった」

実際、本書を読むと、著者自身の肺がん体験とそのときの人間的な苦悩、現代のがん治療の最先端技術の紹介、がんの痛みや薬剤副作用への緩和医療と一般的なケア、がん患者の心の悩みの問題などにも多くのページが割かれている。しかも筆致が柔らかく、著者のていねいな人柄がじわりと伝わり、分かりやすい。また、それぞれの文章の大切な箇所には傍線を付するなど、気配りも細やかだ。本書は題名だけではなく、内容もまた実にユニークなのだ。そのユニークさは、目次を一覧しただけで分かる。紹介しておく。

I 正しく理解すればがんは怖くない

「がんと闘うな」は間違い
がんの性質は変化するもの
早期発見治療は不変の法則
がん放置療法には功罪あり
手術でがん転移は広がるか
がんの悪性度はいろいろ

II がんの多くは治る時代に

上昇を続ける五年生存率
治療成績の向上はなぜか
外科療法はこんなに進んだ
ピンポイントの放射線療法
がん化学療法ここまで効く
がん免疫療法に大きな期待

III 患者へのケアも行き届いてきた

かんと共存共生の緩和医療
がん患者に社会のサポート

IV 万が一のときは、覚悟を決める

がんで逝くのも悪くはない
天命と受け止める死生観を
残された月日をどう過すか

いま、がん診療について衆目を集めているのが、近藤誠さん（慶応大学病院放射線科・元講師）の著



書『患者よ、がんと闘うな』『がん検診、百害あって一利なし』『がん治療の95%は間違い』『がんの放置療法のすすめ』など、いわゆる「近藤理論」である。

本書の主にIとIIで、著者は「近藤理論」についての見解と、「異議申し立て」を懇切に述べている。その一つが、がんを「がんもどき」と「転移をする本物のがん」の二つに色分けした「近藤理論」だ。あらまはこうだ。

「がん細胞の性質はじつに多種多様で、二分できるほど単純ではない。最初は「がんもどき」と思われても、時間経過とともに悪性化という本性をあらわにして「本物のがん」になるものは幾らでもある。さらに悪性化につれて浸潤や転移を起こす。「人生いろいろ」というが、「悪性化の進み方もいろいろ」だ。だから、「がんの早期発見治療は不変の鉄則」であり、大切だ。放っておいてはいけないのだ」

この「異議申し立て」は、いわゆる「反論」ではない。がん研究に生涯をかけた高名な病理学者、そして国際的な「札幌がんセミナー」の創設者、あるいは市民の「がん相談」の実践者という広い視野からの著者の学問的良心に基づく見解でもある。読み進むにつれて読者は自ずと、現在の最先端のがん医療と最新のがん研究の緻密な成果に触れることになる。私は臨床医として、学問的にも啓発と感銘を深くした。

ⅢとⅣ、とりわけⅣでは、著者のスケールの大きな生命観と滋味深い人生観が語られている。熟読を勧めたい。

著者には、編共著『がんと対話』（春秋社）があり、大学教養部学際講座「がん—細胞から人文・社会科学まで」企画実践の経歴がある。いずれも1980年前後のことだ。本書タイトル「人間」のユニークさは、そのころすでに芽生えていたのだろう。